

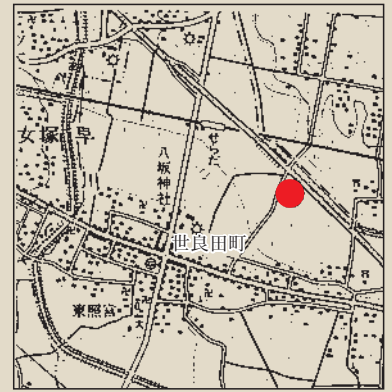
せ ら だ す わ し も い せ き
世良田諏訪下遺跡



第30号墳

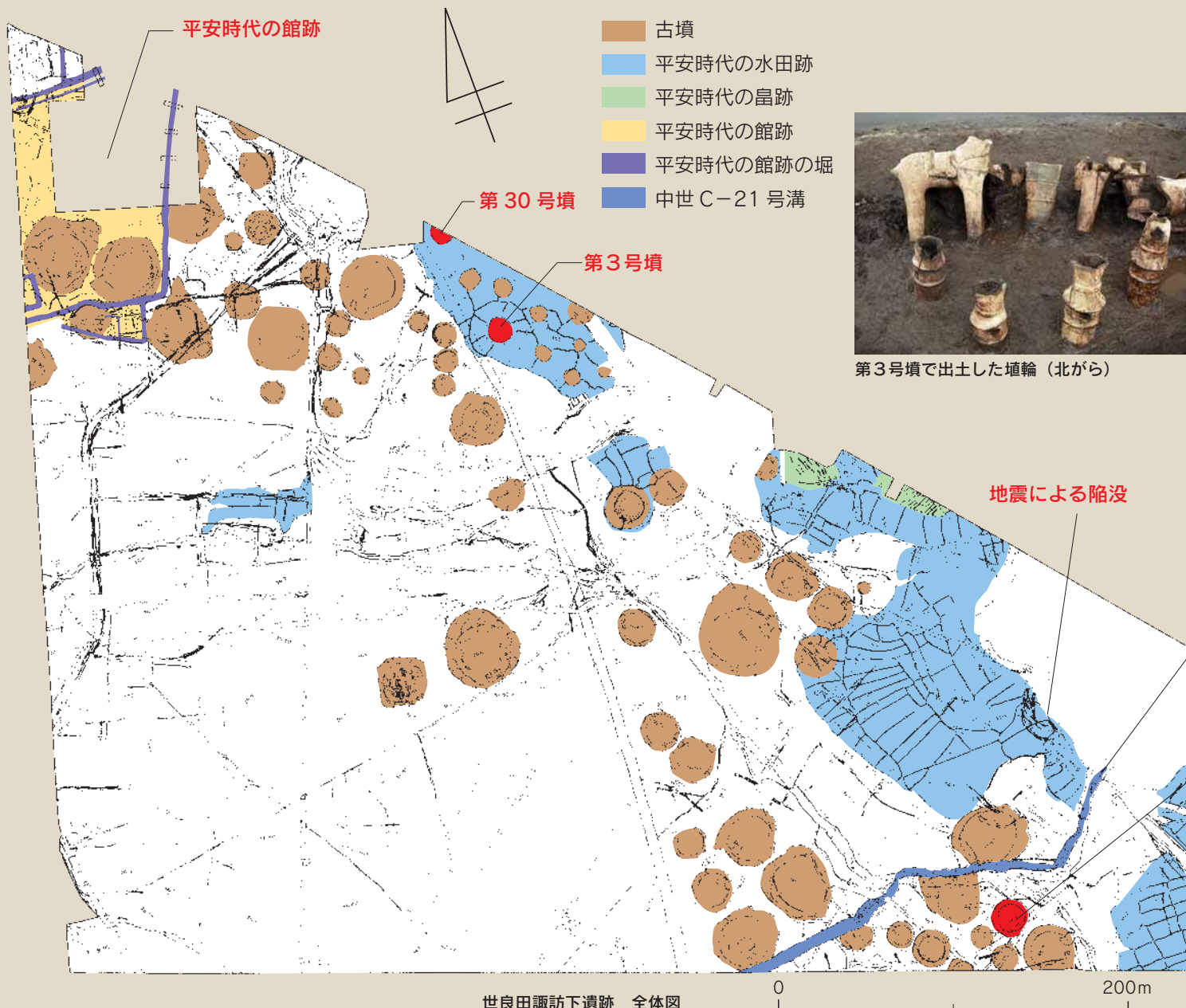
世良田諏訪下遺跡の概要

世良田諏訪下遺跡は、太田市世良田町に所在し、大間々扇状地末端部の石田川の南側に位置します。平成3年10月から平成5年6月まで尾島第二工業団地造成に伴い発掘調査しました。見つかった主な遺構は、古墳時代の竪穴住居跡5軒・墳墓73基(帆立貝式古墳4基・円墳69基)・溝1条、平安時代の竪穴住居跡13軒・館跡1基・土坑4基・溝83条・井戸2基・平安時代の地震等に伴う早川の洪水によって押し流された土砂に覆われた水田跡・畠跡、中世から近世の土坑729基・溝196条・井戸20基などです。これらの中で注目されるのは、古墳時代の墳墓です。この遺跡の南側から太田市小角田町の間は、「世良田四十八塚」と呼ばれ、かつては古墳群が存在していましたが、今では二体地藏塚古墳など一部の古墳を除いて、耕作のため削られて平らになっています。発掘調査された古墳のほとんどは、盛り土が確認できずに周溝だけが見つかりました。しかし、石田川に沿った低地に立地する第3・30号墳を含む11基の古墳は、平安時代の地震等に伴う洪水によって押し流された土砂が堆積したため、その後の耕作による削平をまぬがれ、30~60cmほどの高さの墳丘が残っていました。第3号墳や30号墳の埴輪群は、埴輪が並べ置かれた状態が確実に把握できる埴輪群です。これらは、古墳時代の祭祀の様子を表情豊かに表現しています。古墳時代における大首長の祭祀等は、大古墳の埴輪配列から判っていますが、世良田諏訪下遺跡の埴輪群は、小規模な円墳からの出土であり、小首長の祭祀を考える上で重要です。



遺跡位置図

※第3・23・30号墳出土の埴輪は、群馬県の重要文化財に指定されています。
 ※C-21号溝出土の笹塔婆等の木製品は、太田市の重要文化財に指定されています。



第3号墳で出土した埴輪 (北がら)



第3号墳

二段に構築されている径約16.7mの円墳です。低地に造られたため、平安時代の洪水で埋まり、墳丘が0.5m程残っていました。人を埋葬した施設は分かりませんでした。周溝は全周し、上幅5.0m～5.6m、深さ0.32m～0.56mであり、底面は幅2.0mの平坦で、断面形は、逆台形状です。

壇輪は、下段の幅1.0m～1.2mの平坦なテラス面に隙間無く、円筒壇輪が159本並べ置かれていました。下段から朝顔形壇輪も、見つけましたが、上段に並べられていたものが、落ちたものと思われます。形象壇輪の一群は、下段の南南東の一部を割いて、平らな面を幅2mに広げて置かれていました。形象壇輪の上の部分は壊れていましたが、基部は置かれた当初の状態で見出されました。

馬形壇輪は、円筒壇輪列に組み込まれた状態で、馬形壇輪2頭の間には円筒壇輪を1本挟んで並べられていました。先頭の馬形壇輪に添うように、人物壇輪(馬子)が1体馬の進行方向を向いて置かれていました。それを墳丘側から見るように、両端に棒状の楽器を握り踊る女、左側に鏝のある帽子を被る男、右側に楽器をかかげる男の、人物壇輪が弧を描くように並んでいました。

第3号墳 (南から)

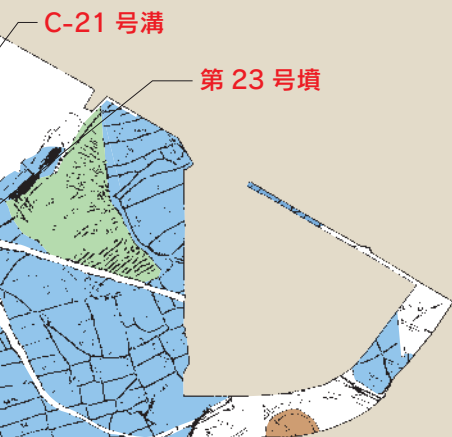
また、墳丘上にあつたと思われる家形壇輪が小破片の状態で見出され、南西部の墳丘斜面から出土しています。



第3号墳の壇輪 (南南東から)

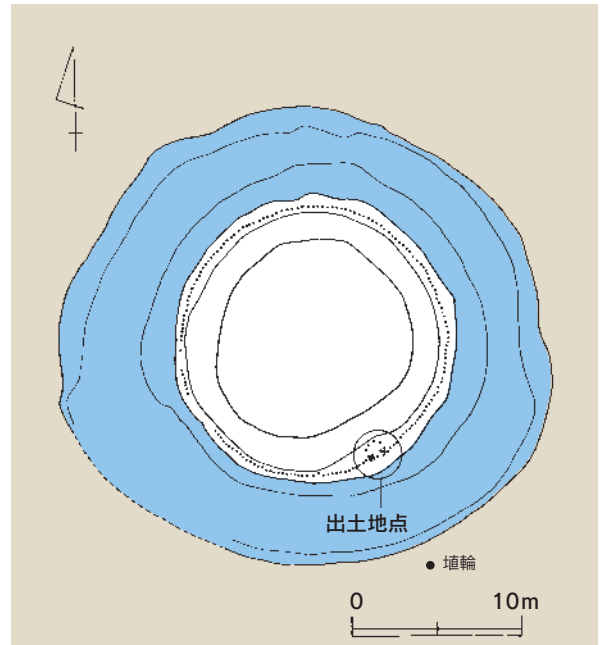


第3号墳 (向かって右が北)



第3号墳で出土した壇輪 (北から)

第3号墳出土の埴輪



第3号墳略図





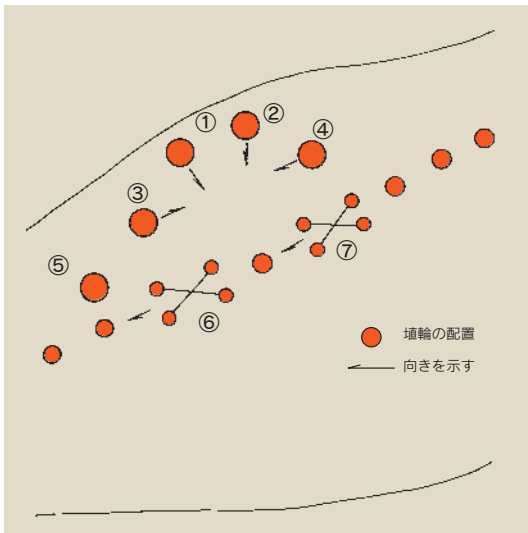
⑥



⑦



⑤



第3号埴輪配置略図

- ① 帽子をかぶる男 (高さ64.8cm)
- ② 楽器をかかげる男 (高さ62.0cm)
- ③ 楽器を握り踊る女 (高さ58.0cm)
- ④ 楽器を握り踊る女 (高さ63.0cm)
- ⑤ 馬子 (高さ60.1cm)
- ⑥ 飾り馬 (高さ58.0cm)
- ⑦ 飾り馬 (高さ63.0cm)
- ⑧ 家形埴輪 (高さ47.0cm)



⑧



第23号墳



第23号墳出土の埴輪



見つかった第23号墳（南から）



第23号墳（写真上が北）



第23号墳で出土した埴輪（南から）



第23号墳で出土した埴輪（西から）



②



③



鎌

径15.5mの円墳です。周溝は全周し、上幅2.4m～3.2m、深さ0.3m～0.7mで、両壁とも緩やかに立ち上がります。埴輪列は存在したと思われませんが、墳丘は削平のため検出できず、遺物は周溝内より出土しています。

特に形象埴輪群を中心にして一ヶ所(周溝内)から流れ込んだ状態で出土しています。それらのうち馬子・飾り馬・裸馬を復元することができました。そのほかに女子の頭部・人物埴輪の基部2個体分・琴・巫女が捧げていたと思われる罍・坏(碗)が出土しています。



②馬を飾るための馬具(雲珠・杏葉)

①轡を固定するベルト(面繫)

③④左右の形が違う鏡



- ① 裸馬 (高さ83.4cm)
- ② 飾り馬 (高さ81.8cm)
- ③ 馬子 (高さ66.0cm)
- ④ 巫女 (頭部高さ17.0cm)
- ⑤ 琴 (最大長12.8cm)
- ⑥ 罍 (高さ4.0cm)
- ⑦ 坏(碗) (高さ3.3cm)
- ⑧ 坏(碗) (高さ3.0cm)



見つかった第30号墳（南西から）

第30号墳

二段に構築された径15.2mの円墳ですが、河川によって周溝の一部を壊され、約半分は調査区の外です。平安時代の洪水で埋まり、墳丘が0.5mほど残っていました。死者を埋葬した施設は見つかりませんでした。周溝は、確認された部分で上幅2.8m～3.6m、下幅0.9m～2.0m、深さ0.8m～1.4mです。周溝は、内側が比較的急に立ち上がり、外側の方がやや緩

第30号墳出土の埴輪



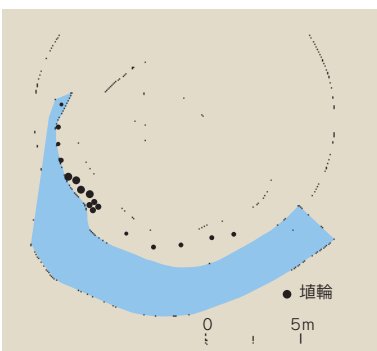
第30号墳（写真ななめ左が北）



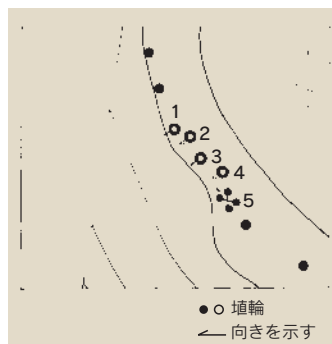
第30号墳で出土した埴輪（南から）



第30号墳で出土した形象埴輪（南西から）



第30号墳略図



第30号埴輪配列略図

- ① 琴を弾く男（高さ71.6cm）
- ② 王冠を被る男（高さ69.0cm）
- ③ 巫女（高さ65.8cm）
- ④ 馬子（高さ61.0cm）
- ⑤ 飾り馬（高さ84.2cm）



やかです。断面の形状は逆台形状で、底面は平坦です。

周溝の立ち上がり際1.6m～2.0m間隔に埴輪列が残っていました。円筒埴輪列の間に馬形埴輪の足・人物埴輪の基部が並び置かれた当時の位置で出土しています。西から琴を弾く男・王冠を被る男・巫女・馬子・飾り馬の順で並んでいました。



平安時代の水田・畠・自然災害



見つけた水田・畠跡（写真上が南）

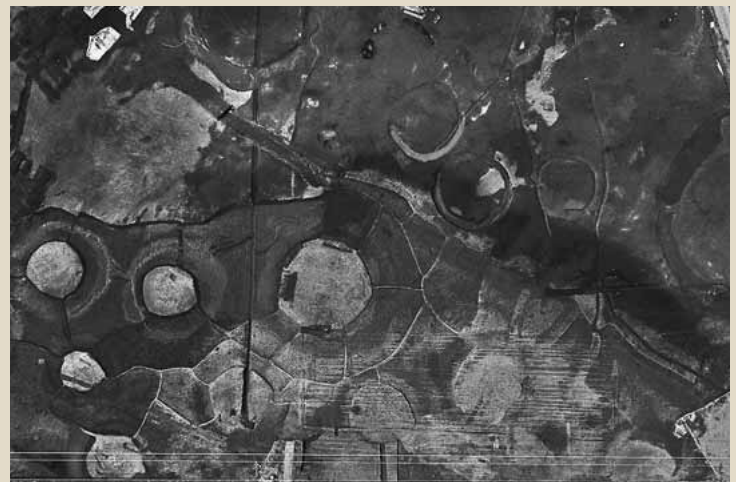
世良田諏訪下遺跡の北側は、石田川^{きんせつ}に近接しており、この石田川に沿った低地部分から南東部に、平安時代の洪水によって埋没した水田・畠跡を検出しました。検出した水田跡の総面積は29,938㎡、畠跡は3,278㎡です。水田跡は、地形に制約されていると考えられ、特に古墳の周辺では、墳丘^{さくへい}を削平することなく、畦畔^{あぜ}が古墳を中心に放射状に造りだされた状況で水田化されていました。比較的地形に制約されない南側部分では、方形^{ほうけい}に区画された水田が確認され、半折型の条里水田と推定されています。

この水田・畠跡を埋没させた洪水が2度あったことが調査区の土層を調べてわかりました。1回目の洪水層が見られるのは、畦畔^{あぜ}部分であり、5cmほど堆積しています。この洪水層の上に洪水層と黒色土の混ざった層が存在し、水田・畠を再生するための畦畔^{あぜ}を作り直している状況が確認できます。2回目の洪水層は、厚く堆積し、もっとも厚く堆積した部分で1mほどです。この2回目の洪水で、低地部にあった水田・畠を埋め尽くし、多少の高低差のあった土地を平坦なものにしてしまっています。この2度の洪水の時期ですが、最初の洪水は、弘仁9年(818年)の地震が原因の洪水と考えられ、2回目の洪水は、住居を埋めた洪水層との関係から9世紀後半と考えられています。

右ページの写真は、弘仁9年の地震によっておきたと考えられる地割れと陥没^{じわく}です。



水田跡と畠跡の段差



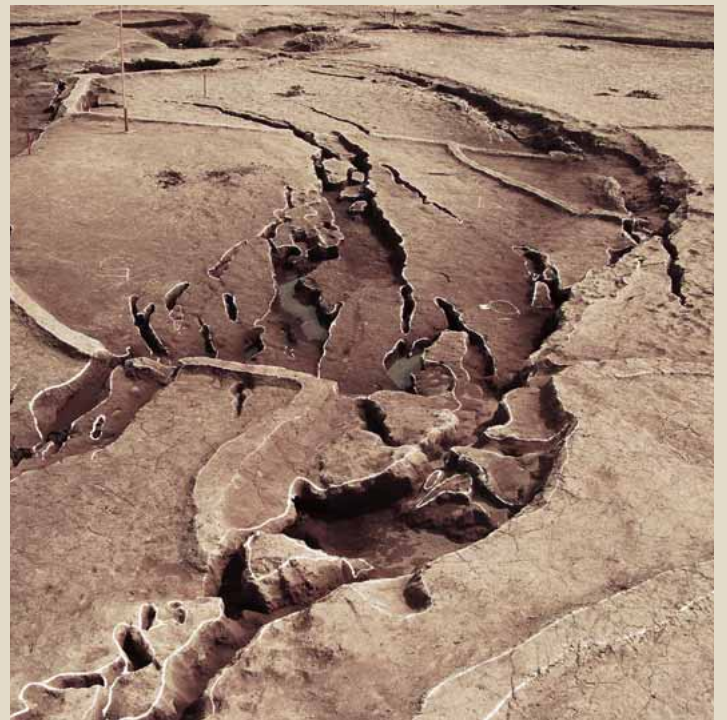
古墳周辺の水田跡（下が北）



水田跡と地震による陥没（東から）



地震による陥没（東から）

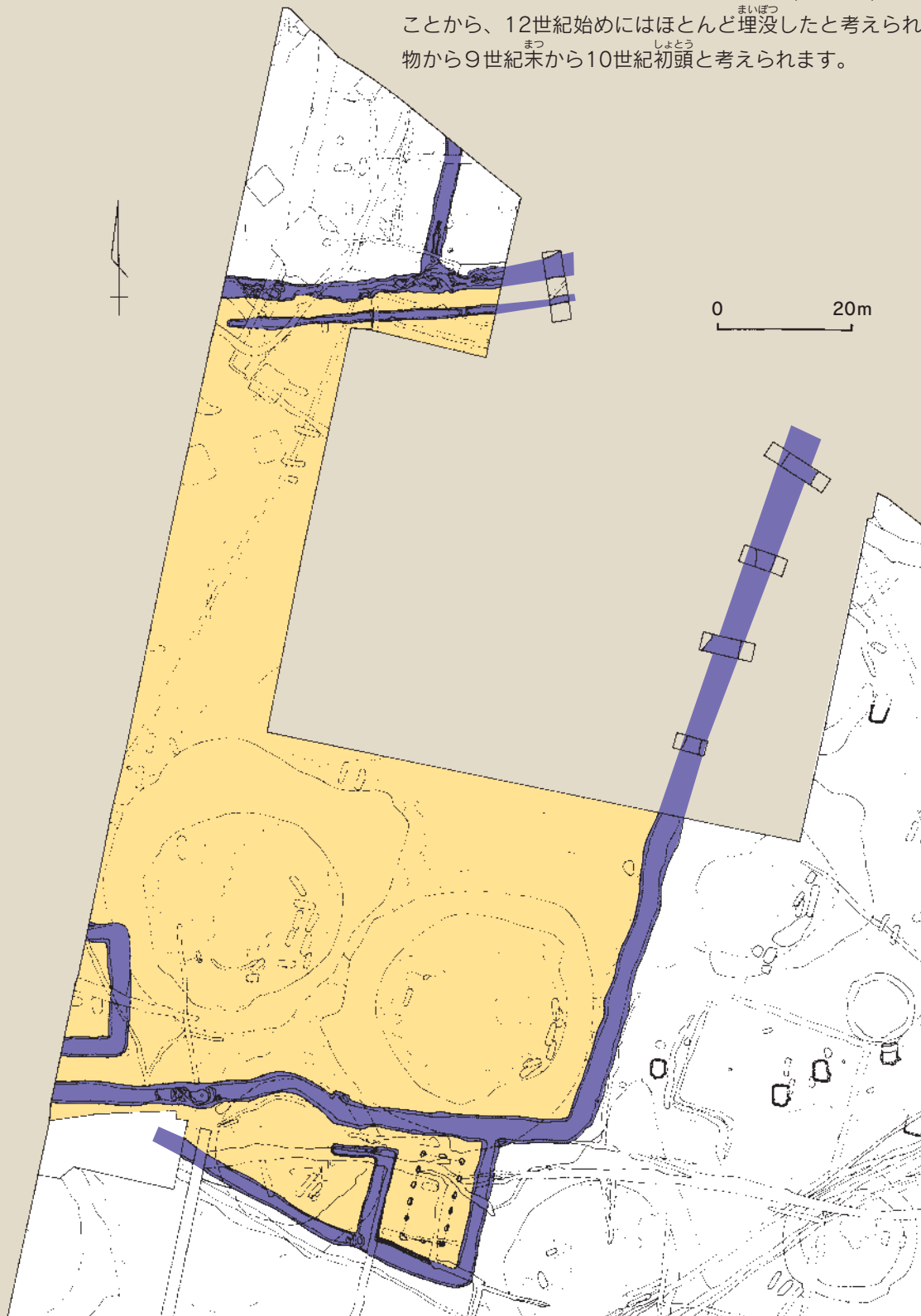


地震による陥没（北から）

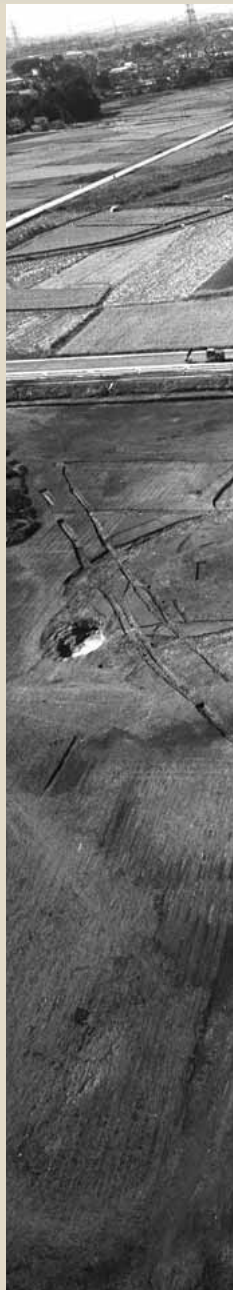
やかたあと 平安時代の館跡

平安時代の館跡は、群馬県内でも発見例の少ない遺構のひとつです。館跡は遺跡の北西部に位置し、館跡の北および西側は、調査区外となっています。調査した部分だけの面積でも8,630㎡とかなり大きな館跡です。中心部の形は、南辺の堀に対して東辺の堀が約110度開きますが、全体の形は南辺の堀と北辺の堀が平行であるため、平行四辺形となると考えられます。東辺の堀は、長さ128mにわたり確認され、南辺の堀は長さ75mにわたり確認されました。南辺の堀の南側から南北19.2m、東西52mの小規模な張り出し部を持ち、さらに内部が区画され、南北19.2m、東西12.8mの方形区画を検出しました。その区画内から唯一の確認できた掘立柱建物跡(桁行き5間、梁行き2間の側柱式掘立)を検出しました。また、館跡の東側から、点在した状態で同時代の竪穴住居跡13軒を確認しています。

館跡の時期は、堀の上層に浅間山B軽石(A s - B)の堆積があることから、12世紀始めにはほとんど埋没したと考えられ、出土遺物から9世紀末から10世紀初頭と考えられます。



館跡全体図





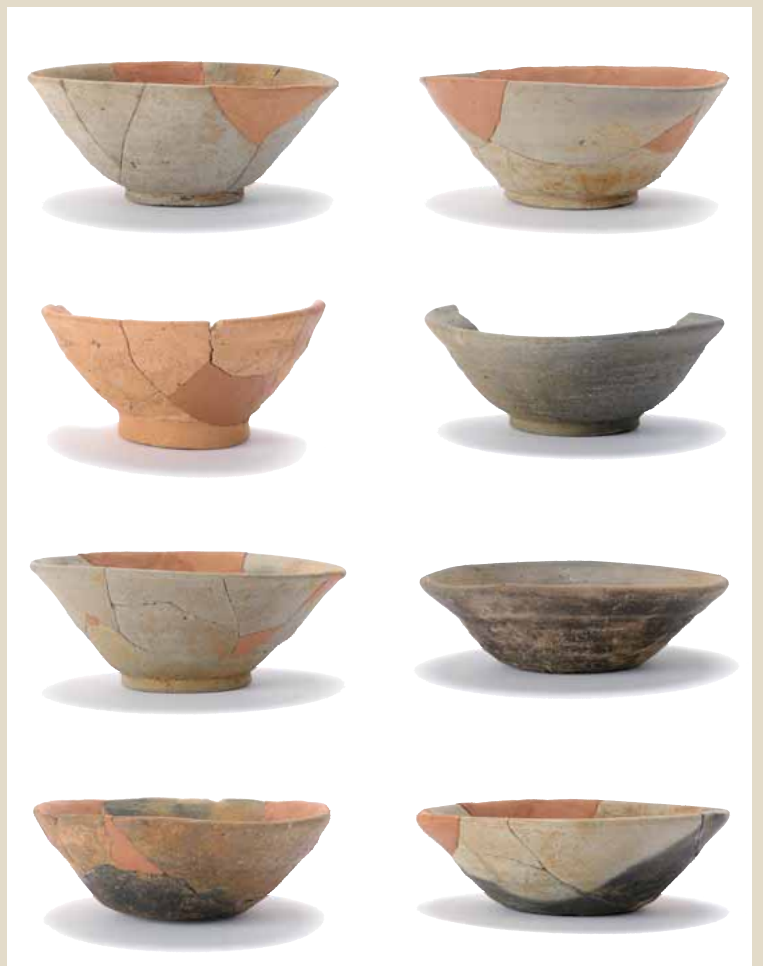
平安時代の館跡全景（写真上が西）



平安時代の館跡 南辺部の張り出し部（写真上が北）



掘立柱建物跡検出状況（写真上が北）



館跡出土の土器

鎌倉時代の溝

中世の遺構では、笹塔婆などの木製品が大量に発見されたC-21号溝が注目されます。溝の時期は、出土した陶磁器から鎌倉時代末(14世紀前半)と考えられます。溝の大きさは、調査した範囲で全長253m、幅4~7m、深さ1.6~2.2mです。溝の走行は東西方向で、東は石田川の氾濫原で確認できなくなります。西は調査区外に延び、その延長線上は中世に栄えた世良田宿の中心部になります。

C-21号溝から発見された木製品は、笹塔婆439点・木皿2点・板草履7点・折敷6点・曲物の底板1点などです。笹塔婆の形態は、大半が上端部を圭頭状にしていますが、左右両端に1~3段の切り込みを入れるものや切り込みのないものがあり、下端部は削り尖らせています。大きさは、厚さ0.1~0.3cmと薄く、幅1.8~3.8cm、長さは23~48cmです。書かれている文字は「南無大日如来」が最も多く、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」などが少量あります。

この溝は、走行などから西の早川を取水口として、世良田宿を通り、石田川に水を落とす1.8kmにわたる運河的な要素をもつ溝の可能性がもっとも高いと思われます。笹塔婆などの木製品は、中世の世良田宿で行われていた仏教的行事で使われたのち、溝に流されたか、捨てられたものと思われる。



C-21溝全景 (写真上が北)



C-21溝全景 (北東から)



見つかった笹塔婆



見つかった笹塔婆



見つかった木皿

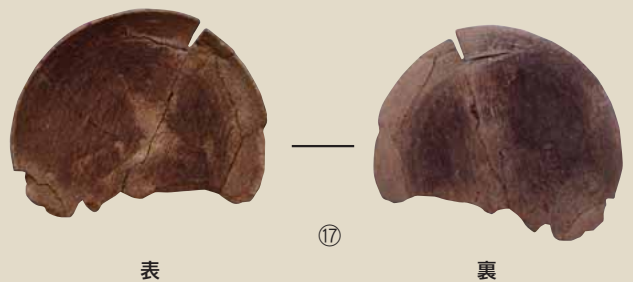


見つかった板草履

C-21号溝の出土木製品



- ① 笹塔婆 (南無大日如来・23.2cm)
- ② 笹塔婆 (南無大日如来・26.1cm)
- ③ 笹塔婆 (南無大日如来・26.9cm)
- ④ 笹塔婆 (南無大日如来・27.7cm)
- ⑤ 笹塔婆 (南無大日如来・18.7cm)
- ⑥ 笹塔婆 (南無大日如来・33.9cm)
- ⑦ 笹塔婆 (南無阿弥陀仏・27.8cm)
- ⑧ 笹塔婆 (南無阿弥陀仏・18.3cm)
- ⑨ 笹塔婆 (南無妙法蓮華經・33.7cm)
- ⑩ 笹塔婆 (梵字・25.7cm)
- ⑪ 笹塔婆 (梵字・35.9cm)
- ⑫ 笹塔婆 (無銘・26.1cm)
- ⑬ 笹塔婆 (無銘・22.8cm)
- ⑭ 板草履 (表裏に藺草などを編み込む・21.6cm)
- ⑮ 板草履 (表裏に藺草などを編み込む・24.2cm)
- ⑯ 漆器木皿 (口径9.1cm)
- ⑰ 木皿 (口径10.0cm)





第3号墳



第23号墳

太田市教育委員会
文化財課

〒370-0495

群馬県太田市粕川町520

TEL 0276-20-7090

FAX 0276-52-6080

印刷 平成21年3月